「礼拝でのかぶり物について」　2022年10月19日

男は神のかたちであり栄光を映す者ですから、頭にかぶり物を着けるべきではありません。女は男の栄光を映す者です。なぜなら、男が女から出たのではなく、女が男から出たのであり、男が女のために造られたのではなく、女が男のために造られたのだからです。ですから、女は天使たちのために、頭に権威の印を付けるべきです。いずれにせよ、主にあっては、男なしに女はなく、女なしに男はありません。女が男から出たように、男も女から生まれたからです。そして、すべてのものは神から出たのです。（Ⅰコリント11：7～12）

11章から14章までは、教会と礼拝の秩序について書いている。当時の教会の事情が分かり、興味深いが、現在からみれば、納得できないこともある。11章は、礼拝で女性はかぶり物をすべきかどうかについて書いている。頭にかぶり物をすることは「自分は下にある者であることの印」を意味していた。かぶり物をすることによって、自分を防御する手立てになっていたそうだが、いずれにしても、自らを低くすることの表明であった。パウロは、この件について、下記のように述べている。「すべての男の頭はキリストであり、キリストの頭は神であるということです。男は誰でも、祈りや預言をするとき、頭にかぶり物を着けるなら、自分の頭を辱めることになります。女は誰でも、祈りや預言をするとき、頭にかぶり物を着けないなら、自分の頭を辱めることになります。」神→キリスト→男→女の上下の序列ははっきりしている。更に、下記のようにも述べている。「男は神のかたちであり栄光を映す者ですから、頭にかぶり物を着けるべきではありません。女は男の栄光を映す者です。なぜなら、男が女から出たのではなく、女が男から出たのであり、男が女のために造られたのではなく、女が男のために造られたのだからです。ですから、女は天使たちのために、頭に権威の印を付けるべきです。」男は神の形で、栄光を映す者だから、かぶり物は必要ない。女は男の栄光を映す者で、男から創造され、男のために造られたのであるから、かぶり物をしなさい。男女差別は歴然としている。「女は天使たちのために、頭に権威の印を付けるべきです」という言葉は、天使も女性の髪の魅力に惑わされるという意味らしく、昔から、男も天使も女性の魅力には勝てないらしい。パウロは女性に心躍らせたことがあったのだろうか。

ガラテヤ書3章27節～28節に「キリストにあずかる洗礼を受けたあなたがたは皆、キリストを着たのです。ユダヤ人もギリシア人もありません。奴隷も自由人もありません。男と女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからです」と、救いにおいては人間の作った差別はないと書いている。かぶり物に関する記述においても、「いずれにせよ、主にあっては、男なしに女はなく、女なしに男はありません。女が男から出たように、男も女から生まれたからです。そして、すべてのものは神から出たのです」と、男女は共存し合い、女が男から創造されたように、男も女から生まれたと言う。

しかし、男は長い髪が恥であるが、女は長い髪が誉で、その髪は覆いの代わりに与えられているものである。「この点について異論を唱えたい人がいるとしても、そのような習慣は、私たちにも神の諸教会にもありません」と、秩序を守れと厳しい言葉で語っている。

パウロは、当時の価値観に倣い、女性を下に見ていたということは確かである。人は誰でも、時代的制約を受けて、生きている者であることは当然である。